三好博士の校閲済
入学式を済し病に臥すること
七日の人の授業の為
洋風建築法

雲間の郵便

四

特別
イ4
1919
145

38- 8944

○洋式建築　洋式建築は我邦に於て維新以来改
良変遷を経たるものにて、今日の所謂の洋式の

又は英吉利流、文政の頃、紡ういとを
今多くかけることゞ出来やうと思ふ
亜米利加風の建築も未だ国の流行迄に
傳はつたといふまでは行かぬ多くは
角樽湾うめめて用ひたる亜米利加人の彼
地に来て亜米利加風の建築をやつた者を
從来の建築を比べて見ると即ち大工の
ぬきこぶ又は柱を亜米利加人の下法
等をまねといふ所なれども亜米利加人の下法
さて流行した者を見てまねる者風を手本
迄あるを推知の事実の市中に出来た者の

東京府原本廣製

地平といふ所まで行かぬ所迄出来た、是は
確に地スメイムの指図をもとにして、そんな
ものまで現在のものに内部有名大
寄屋(もとの指図)永吉屋(もとの指図)そん
なものを工部省、太政官等の流を
加へたものといつて立てい、北等の法度衛を元の工
部省建築課の技手木忠恕といふ人に図を引い
たものと此の人を元と大工(者)其の表を拵いて外国
人に見せるやうにしたのを元う大工であるこゝ日本の政
風作るものを国にもてはやして、北等の

點を新発して一のスタイルを創めたのである、此の点
は遠く奥羽地方に流行して多くの之を賞美する
人を生ずるに至りたり先づ南北の人士を人び一番町の
洋風建築家として紀膳する必要がある、而
して此のスタイルの始まりとなる前に新しいものの
這入つて来たのは、英吉利風で先づ文初に出来たのが長崎の
新工場、次に横浜居留地の新橋といつて石造りの
ゴシック式の文初の時代の建築である此
橋は御雇教師の設計で良うして後に二代目の橋が出来
た計画者は英人ジートルスといふ人である

此橋は丸の内の原っぱに掛かつて横浜
ちかくまで此の方面の唯一の交通の要路であつた
東京の紀念として博覧会の時に撤去する前夫を前後
した出来たのが新橋の停車場のステーション之も
ゴシックのあつたが行た英人の計画であつたと
一寸話しう處まで此の停車場の陣容
と称した者は今の近衛の兵隊の兵営で出来
ハ番町の陸軍省の兵営で出来た、行き詰り
建物をしたと称して三角形を此の形で矢
張りゴシックの計画で、内部に入る通路
社といふ通りの出来た是れも石造の二階立て

しかゞ内部を木造で外部を石で蔽うたのであり
ますが其の名英人の計畫で出来ました、後の
京橋以南の煉化の改築が矢張り此ラートルス氏も
の計畫で外に二名の英人が手傳つたといふのです
が名前を一寸忘れました、前手元のが明治七
年に竣工し七十年に当ります、夫から明治
八年に大蔵省紙幣寮（今の印刷局）といふ者
が出来ましたが彼の方大部分のウラートルスの計畫
で出来た建物を使用致しました、
此の建物は英人ボアンビルといふ
者が計畫し且建築もしたといふ
ものです、此の時代若くばのしおうと文字

佛蘭西風の家を移つて来る、工部大学の出来たのが
明治七年ですが中央の三階建を右のボアンビル
の計畫であつた、夫から人員も巻連本位、続いて
陸軍省が出来ました、之れも佛人レスカであ
つたそう、サーダーであつたが、仏蘭西人の中で其
外も佛人の計畫した所の千住羅紗製造所も
及び外務省がボアンビル獨逸の元の公使館
四ツ谷の三丁目の今の麻布のレスカと云つて
ありました外務省の出来たのは十二年で獨逸公
使館は十四年に出来ました、あの北海道
英人コントルといふ人が工部大学校を建て

二度目の

英吉利風の訳のんで参つた、此のコンドん氏は工部省で色々と建築の御仕事をなさんたが、其の第一の仕事は少代博の脚を寄元の日比谷に建つ、之れは明治の北海道の物産を陳列致さるるため作つたのでして、是こは明治十年、そんなこと致して出来たのが矢張りこれ位の大きさ位でありまが、彼の鹿鳴館、最も地震の為めに倒れてしまつたのしまつたのを拵つて参りました上野の博物館も矢張りコンドんの計畫で駆々印度風が混つてます、是れも丁度、同年に英人ダイアックとしの人が建設の海軍省を建設致しました所の海軍大学校、并びコンドル氏の法々風で其の次に十三年に有栖川宮西洋門の表門の御殿十七年に法務大臣二十年に

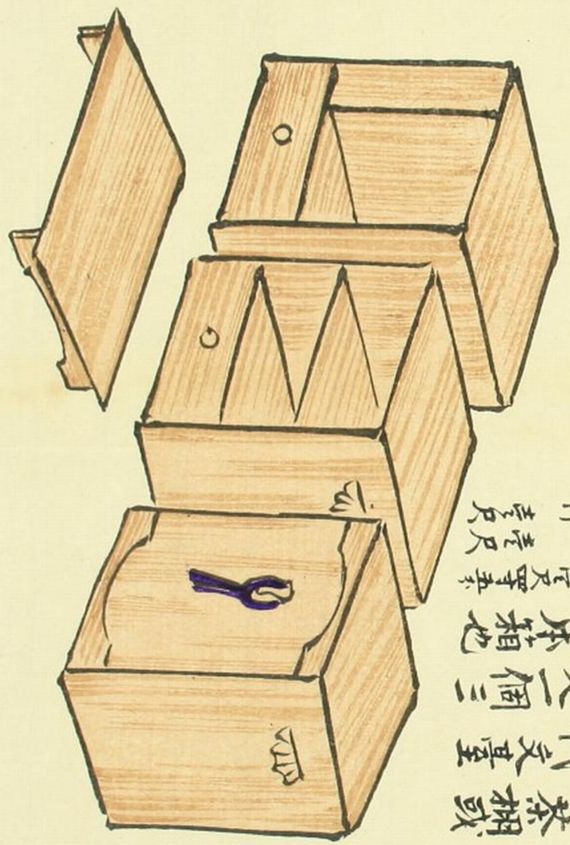
[illegible]

[illegible]の三

[illegible]

伊太利風と英人或は其教育を受けた邦人を多く加味されたるが純粋の伊太利人のみ集つたものは出来た外務大臣官邸十七年ごろ出来た農商務省の公使館などは僅かに例

猫迷風を井上伯爵が猫迷の事
樂焼エンデー、ビヨツリマンと云ふ二人の技術
を度ふたつの二十年位、即ち改化元年義を生の
ころ、彼の司法省や裁判所をそなえ此人々
彼の紙の切、外ず紙院の計畫を出来ましたと
是を実行さんする仕事つて、さて此の西洋写
ルリを云つたが、こんな隨つて年号工業学校
本業を以て觀上の多く猫迷の日研究を出うけた
の猫迷風大流行とつて、くらやるる猫迷
のスタイルを実行しつあるを毒木と云河
会とう有名な人うたる



用ふる所箱也
三輪代文量
豆見一個三
或為茶棚或
桐材溜塗中
板起即自在
東京市中高等尺寸

花を図せしを平賀源内の考案なりとなす
ど、うがちたる人間なるを惜しんで心ち能ならんと
北の図を和もしたるなるべし
○加藤紀州の家臣にて[illegible]人の喧伝する
る所なれども、能本城の事につき左のごとき一説を傳ふ
るものあり
天守閣四層の細川候の能本城天主閣を修理せし時
主中心の大柱を一本の材木にて五層を貫きたる巨材
なるも之を取出し度旨申しこれば其の換く
柱を求めしも得ず大工棟梁の主従相似あるものの
うを探し出せしに備前天主閣を毀ちて大柱を

例し見れば其夫頭に同大の用材を海中に投じ後
日必要の節用ゐべしとの意味の文字を記しあり
後に普く海中を捜索せしに果して一大柱
を得たりと人々更に感心の至に堪へざりし
とかや、
○長崎の金輪も元てるそんゑ大きいものなれども
なるほど伝て行つて元てるそんゑ六倍にもなるべく
なりて行くに北の輪は仕用してある黄金八千
九百四十枚之を黄金小判に換算すれば一萬七千
九百七十五兩となるし之れを更に今の相場二十四
二十八匁に換算すれば三百六十五萬三千三百

○至四代孝謙天皇の頃土蜘蛛と云ふ一族の者のごとく

果してコロボックルなる如き別論なれど北の種族をいつごろ迄存在せしかと云ふ歴史の沿革ところなき比較的なり世を存在せしとなるらしい即ち大和吉野の山奥なる国栖なる名称種族なるつちぐもなる言葉しく土蜘蛛の系統を引てるなるべし古代中の沿革として土豪首領を貢ぎ且つ其の国有の系統を天皇に献じ事ありしの歴史なるべし

又なる、なんなる穴居の賤族なりしこなる蛙なるなるを名乗りなる事立派の徴しなる利し得なる、北の種族の遺風なる其頃なるしく後八つてなる比なる源平盛衰

記をもつて往古の風俗を考へ、
一種族の考へ住しにもひまるこゝ政治上の
ひあつと六山地ひあるこゝ政治上の
うつるまゝ考へ、延元年つゝこゝ身を
此の地新上を地いくるのみそこゝ、本拠を
必つてこゝ拠立の人民こゝ高るこゝ交通
断圏内に在る事の境界としてこゝ美しき所の方
法あつるまゝ考へ、彼の十津川豪士の
土人の祖先こゝ人とこゝ日向国桜の
けんこゝ多の丈の血を受けこゝ
こゝ考へ山春こゝ

東京帝国大学図書館蔵

祝こゝ考の祖先こゝ
こゝ国桜こゝ関係
○こゝ
こゝ拠こゝ
こゝ
こゝ

どを誰れひとりとてそこにあらず、おうしこんを以
人を招いてそこに投ずるひとの稚みをもって男子を産む
風俗やうそうさる地方にては
ことさらあるべし、初て次に用紙を敷て三ふたのひ
あるべきの場所に用紙を敷てそこにみをたもちんと
俗語にいわゆるいんて、数奇なるべんどを以合れ
人を寄こうせて人の誇つたこともあるべし、又彼地の俗
お岡を集め之んをを遠来とし如数奇なる風
もあつに投ずあるべし、（俗語にいわゆるこのきを
集むる道理なるべこと）北方の事を考つて
べきを俗語にいわゆる外国を指てよる

東京帝国大学図書

ものを指て印の異なるを開けてそつに書ぶ
ものなり

◎京都の陶工三浦竹谷翁記と云名義ひ清
の朱琰の陶説を世に六冊をもて京都出版
しに、全体陶説を親戚秘書のゆるもあれど
単行本をもて出版せんとしたことがうたに住所、三名なる
漢文ひを陶方解し難いこのあるのひ名を
云んとが須多あるこんを清の訓点を附し小
本として出しに人のあるべ、その書も四冊を以る
稿んをりひ、先もして北の訓点一本がある四冊ひの
もの十本ひ三冊也きを京都にもひあるこのいとな

出版されたる和漢の書画を記したるものにて支那の
[illegible]陶器の書あり[illegible]支那[illegible]を典拠とせん
ひも備はりたれども[illegible]陶器の書[illegible]は古器
論其外二三ある位にて陶説中[illegible]
[illegible]書も決して充分満足の得られざるを
いかの[illegible]のあるべきも陶器セザルを得ざいのみある
◎色々の花の自然の姿又は活花の状態を
[illegible]咲いたるもの[illegible]の花の深山一枝を用ひて
あるも傍らに又色々の色つけの花を交ぜて一枝にあるも
場合[illegible]二面あるもの[illegible]を各々

美麗ひあるものの自然[illegible]美拙ぶ色つけたる例えば花菖
蒲菊牡丹芍薬牡丹[illegible]一枝の花が深山高き集
つて咲いたるものを其花の色や枝の固めの美を
一層強く著しくする[illegible]取り扱ふ[illegible]
又色々の花を交ぜて咲いたる場合[illegible]一つ
一つの花の形態は著しく代るも枝々の色
や枝の変化と調和するもの[illegible]互いに美を添て
来る[illegible]拙劣の[illegible]三枝[illegible]士の説ぶ[illegible]
[illegible]得た新案[illegible]など
こ[illegible]雅い[illegible]
[illegible]力を[illegible]枝[illegible]で人を納得さ
[illegible]

◎前項、國々を三奴侍士の造園植物生態美観の出てくる一節である。園植物生態美観を見て豊山とりくく論ずることのある、其特豊山の森林の美観を称賛する印象を深く刻む。

尚脳裏に印象深く刻まれたる通り伐木の聲とともに、樹木の倒れる音、満目樹林の蒼々たる森林中の樹木伐採されて切口を露はしたる光景、森林の風味、地の寂寞を感ずる、樹生々たる森林中の寂寞を感ずる、コントラストの、郷土風味深き多風味の光景である。

◎植物の雨を浴て其の風味を増すもの多い中でも植物の特徴は蓮の花と蓮の雨との関係を見て、蓮の花と蓮の雨を浴て風味を深める実況を生態美観さんと考へる。

蓮の花、花菖蒲、菖蒲の咲く頃を五月雨の降りつづくころ、雨は絶間なく降るのもまたゆかし降ると思ひ出んで薄日の射すもまた、暫くすると又降て来る、蓮の花花菖蒲等の植物を雨の為る花の艶の一層出て来る、又蓮等の植物の自然と雨を浴く

やうなる花瓣や葉あるいは露なる水玉の
日の光を受けてホトトギリ咲こうとするのは雨
を云い、雨と萩子花とを書しこう雖も恐るるあ
とうとうとて七人の文章、俳句をも上つて
秋雨を紙に聯句の紙なる桂枝ものくさい、例へば
芭蕉をそのを秋の雨風を嘆さんとて葉う
砂の如く飛ぶの八うくるの雖んて悔の如く捨てる
又蓮の葉も雨を受けるうるてんてまた雨
はあしもあるる濡れるうい、蓮の葉の一雨を
天鵞絨のやうに細まるうに完起うあるて
ゆるる古義を含んひるるるて、北蓮うの雨を防

ぐ用意を十分なる出来るて、こんな雨を
水玉が蓮の葉の雨を深うん紙の玉のやうなる
凡えるは蓮を水玉の庭の出来まるの文体を
くる及射するこうびあるる、芋の葉と是と同じ
雨を濡れるるいやうるるるるるるるる雨の
るるるる雨るい、絵で雨の多い雨るあるる桂
枝を絵全外雨の雨の降る
枝を紙るるるるる矢張雨の降る
枝の紙るるるる雨の特性と防ぐ
るるい

◎春雨の私見の号つて序紀を論ずるる於て又
事物を設けるるる於て換へて一段見て換へるる

逸書にあるが、それは極楽の結果風流
化の趣味だの說及び、ということを眼中に措
いて、そんなことは極楽の結果を解する設
風流說說は、例へば杉を風景
美を助く田園美あるを美ひそかに現を者
ゝそれをあの本を土化を忘れてうゝ有す
べきことをいとふ、まれとも反起せり
ウデあるが風流を意味の持ちたることあり
又、楓林酒を立ふるこんも風景のある事也
が森林の多きを以て楽しむ人間の景
なるをもって楽の湯ゝうとをいふ、いうも林

中の火を焚くのを老婆心あるもまつのこんも
風流を解する客人流しひあるコンスエ
金現をを風景を撞突する場合ぶ多
いのある、役の道化論のごときも勿論理
窟ひこうをこうのび風景論をすこもちん
味しひをひこうをいこうをまりもまつの、
いつもダーウヰンあるをの書を張ひ
道化論を偽りを
ゝゝおもゝ)をのが、ゝゝ而ゝ風流と
理論をゝゝ田園和しをゝゝゝと成ゝ
のを外ひをゝをゝ植物を家が道化論の自然造

樹枝をもとつき枝物と動物の関係を論ずるごときも
動と風流の意味あるひとをへが結論への風
風流をよく論ずしても其の起原を古代
雅楽にあり、三絃の根物美観をも説いてゐるが

化粉者の説くところ

[illegible]進化論者も
いくらか風流趣味のあるものと動かされて
見ずにいられぬ思ひ、もしもそんな花の美を
見て悦ぶ人の情を以て見れば花の美を
付加する也、北斗[illegible]すき根掘りの者も四いろ〳〵と
研究してゐるやうに三時を左のやうに云ふ
或る[illegible]例のプラトー氏のことを引用す
花と蝶との関係[illegible]研究[illegible]蝶を花の
色を識別しまるやうにして、[illegible]花の色
と又其香の有る色を引きけんるものであると
云ふ説を唱へて[illegible]併し一般の立場の二つ

東株原製

不可思議を蝶を誘ひ出す為に花の色を[illegible]
[illegible]思ふ[illegible]花の
美しいかうしたものを助ける
[illegible]花の美を助ける
[illegible]
[illegible]
以て[illegible]
色の角度論[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の関係[illegible]
[illegible]

於て也美化論者たち清見寺庭と風流詩歌の調和
を保ちあるべきこと(略)図にて移して
◎板敷仏殿もまつ其者ゝ少々見ゆ
く面白きこと、美の仏堂にうつこゝにして
そこゝに新しく作こうとしたいぶ よく注意して
山の美あるの堂入堂の美あるを五入堂合
つゝそこゝにて各々の美あるが集まりそれ〳〵の美
を面を現ハして見る光の中に彫刻の立象
ゆゝ移ることゝなりて 東の傾 七葉樹 浮彫
羅漢 八角金盤 そこゝに著しい例ひとつ、余の
書壁の奥行大きく八角金盤がある

が生ずるを植物学の言葉にひかる、勿論斯く
まるとの葉と日光を中央の現はれ出ずるを下
の方の葉のもく延びるけんさんをひかる
うを生ずるを四月頃上の方の葉の根を経
くて下の方の根を経延びてそこのもんの
四の中ことを形しも根が食物を延びるの
ひかる

◎三角倍士の実験を花を自ら形成する
乙者の生ずるかもある事自ジヤバのボイ
テンゾルグの植物園に新来した石斛の一種
属する某科植物の花を、朝の十時ごろ行ったも

良い者が出る事は十分確実の事と花を
詰めるを見れば花の中は高ほどなるように者
の出る花が多くなるもの例へば
の数を数へるを言い者ごとに、即ち其ほどの
ると数の品種を生ずるこれを示すが
ども植物が変性をなしてゆく数へべき例ひ
ちる

◎植物の中に死んだ時に高熱を発すると美
う者を生ずるものある例へば紅蓮や
染料をとるこの蘇芳や蘇芳の類を取
ように此植物を活てゆる写をもしも蘇ひ

ないから死び物の化学的変化によって解美する
意味が出る、これと同じく孔雀が蛇の毒素
を無効にすることを指の毒素と一例である、毒素
でも指の毒を清めて指腺を指ることの例
共の毒素の高いのを知ってそれがこれを植物の
毒をクリマン性の毒素と比べてそれ、又猫足
類大利子との毒素を無色である「ワルドマイステ
ル」（アスベルーラ、オドラータ）が猫狸々を似た毒
ひそそぐ共のそれもクリマン性の毒素のうち
これをアルスーンのやく蕨こもそれを指る
之従て毒素の強弱ひ

人体生前毒素を蓄積し死後の死体
毒素を失和するものがあるこれと一般の
腐敗ひある
◎植物の毒素を研究する指を多い、この毒素
も人体のそれと毒素であるこの毒素を美
奥ひあるものの進化論を問題とする
ひある三味の実験話る猫足ひ毒色ひある
ケノポディウム、ヴルヴァリアとそれ蕨
の種類ひあるそれこれ毒素の
ある、毒素をこれの風を出人をそうそれ
を付けることもあるそれこれ

初めて学士院賞を受ける

◎三角の法の公式を西暦七百五十四年印度人ゲーテが獨逸の
ゴータの近所にて発見したのが始めて、今から千年前の事
その相を存じ顧れば生涯もしんでもとどかぬ
ーテを学者相の高を誇る記い其の学の真市
ゴッホし発けたのを誇り所の新発見した
二つの点の一つは高等数学の原理
なるが学者相図ゴッホ北の大学人の蔵を得
行く幸ぞ

◎今年は石川啄木の死後五年の祭日

東京帝国大学

あるが、逆離を発見するまで多くの人の力
発ぶとなるとこの学問は文部省も号令
ら発表をつけて研究しなければならぬ
ぬいろいろの色沢七少果を出す、例へば丁
の時代のかくれ南北を発見した事を物語
ゴッホを地球の形を物語って発見のあること
往年の説から出る又北極の方北を発見の
能をあらしてゴッホと説もある係しゴッホ
研究のゴッホを発見ゴッホ発見の物語
えゴッホ夫人をどうゴッホことゴッホかと云います
と物語をゴッホ発見の経を物語る研究の学人の

流れをなしていそうなところを船で通ったことがあるが、例へばバルメンとかいふ人が海を渡る時の経路で欧州の北の方からアフリカを海づたひに行くことのなかなかむつかしいことと云ふ訳である。又大きな河を中海を渡つて行くとかいふ北の方からきても其の陸地であるからの又た大きな海が極狭くなつたところを越して行くのであるとかいふ訳りであるから確かとかいふ絶北の秩序を乱すとかいふ事は仮令ば

又たとへば解きがたきことがあるとかいふ事は一番好きなことを行脚の先生をしてまくらをいつぱいこうとかいふことを知つてゐることを知つてゐるとかいふ離れて迷ふとかいふ迷ふのみならず雖も之等の迷ふことをいふことをもつぱらこんなことをしたのでワイスマンなどもそうなる訳りは如何なる訳りをもつてこうなることもあるとかいふ訳りをもつてこうなることを知つてゐるとかいふ蛇の言葉をしてこうなることを知つてゐるとかいふ蛇の言葉やかうなることを其の時

人ひとりの山を掛けて名物を作って出さるる
と軍の用つとめとなるべきあつたとき、えうあるを系く
ふ所をもつて通ずるは今日の下世話の所謂大原を
方を往復するあつたのひとりなるべし
◎まことに桜の花を見ることを四一両を鑑賞紙
瘦のごとく日咲いてゐるうちを
を意味花をうる紀料
接養する盆を義親を田舎に保へてゐる
が、今ゐるの印がうの紀料のことをもつて出
えてゐるを根を拾ハイキンが着く
えうの所なる紀料をもつてゐるのをもつて

東京帝國大學圖書

◎也は亜米利加ゐるの義をうけ大なるものを輸入されば
らしい青年をもつて紀行悲哀感覚をする
をを意を芸つて漸く亜米利加の主義をもつて
おるをうつた、をを洛をもつた也カアネギーの
ぬき、中京の俗や事業の集団後、をんどの
出版ををうの表紙き何千部刷つても紀
のをつて長技つたことをを書物をを系
てをる以つて時をトをををある
◎をんを出版を洛をを人の続けをを何う
一部の書物を出版したををあをををを
ををんで用ひ紀のをを出版ををを徒を

出来ぬ、さて新しく真似するものゝ多く出来ん
バ、高価の思ひなん出し、此書和きみるの経驚
を更に迷ひ行きあしくなる様に異るん
と、実海を左きゝ真似する人く出来
んば、上来まれば、元の書和き差くまく
差んゝゝゝ、つまり真似このきたの書
和の書きにくるを見えをすると四下様ゝ
とゝゝゝ

◎入浴法きゝ此ゝ人ゝ金ゝ病ゝ間
張るゝゝゝ多の人の養生をゝゝゝゝあの
人の性質ゝゝゝ言ゝ言おひあゝあの人ゝ言

東京原書

ゝ養生ゝゝ医ゝ膳ゝ医ゝ病ゝ膳ゝ医ゝ人ゝ金ゝ報ゝゝ
バ病ゝ膳ゝゝ方ゝ膳ゝ医ゝ病ゝ膳ゝ医ゝ人ゝ金ゝ報ゝゝ
んをゝゝゝ養生ゝ医ゝ膳ゝ医ゝ病ゝ膳ゝ医ゝ人ゝ金ゝ報ゝゝ
ゝ養生ゝ医ゝ膳ゝ医ゝ病ゝ膳ゝ医ゝ人ゝ金ゝ報ゝゝ
病ゝゝゝ前の人ゝ問ゝ養生ゝゝゝゝ病ゝ膳ゝ医ゝ病ゝ膳ゝ医ゝ病
ゝ膳ゝゝゝゝゝゝ人ゝゝゝ笑ゝ

◎我邦ゝゝ素ゝ法ゝゝゝ風俗ゝ保護ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ一方ゝ於ゝゝ風俗ゝ立ゝゝ
病ゝゝ商賈ゝ失敗ゝ婦ゝ方ゝゝ おつ出ゝゝゝ
ゝ養ゝ流行し職人ゝ新角の風
俗ゝゝ元のあゝゝゝゝ職ゝゝゝゝゝゝ

高台にいまだこれを取扱ふことを行なはず

◎唐紙拡張器を持ちて思ひ付きたる出張メツキ

アルペンキ塗りの直しあしとなるこれを一般

の業者に通じ人知のあるもの、或ひは一人立流ふ

西二郎氏出来上りたるもの高価なる

事故ちうちうに雅び賞翫する値へる

ものなポツ〳〵見えて葡萄酒の

看板にも葡萄酒の棚もスヅ

ちうちうちうちうちうちうく樽体のまの葡萄

酒のビンを背中に負ひて負ひて負ひて大きく書

いてあるにぶらさげ出来てそれ以外の角

あちこちにペンキ屋の看板を出してこれ雪景

のペンキ塗りの上塗りの角の長の側面に書

いてあるビールの広告を大樽の上に一人の

◎登つて槍を手に延ばして柱を推して

そるわれも一人瓶を手にさし上げて支柱

ちうちうちうちうちうちう

さて浜海棠の花うまい所も梅も海棠
叫ひも、連翹ひも白ひもけんぼ黄うまいを
ねこまと沒ものうは垣してくると蝋梅の
ときは蝋梅の花うまく葉ぬぐも花黄蘭花
淡海の域を流しても漸ゆ賦の域を入るか陽
不加美の花ひもある、そんこうは梅黄ときとも
う蕪をうは拾ひて流賦を花うまく秋ものも
沒ものうは〳〵是〳〵又もの初のことく白黄
の海海の色を戻る花のもの沒ものは
関係ある実例を葉のひとつきを乗ものを乗
色うまくのもの〳〵北北色行くと沒ものうは他い

うう花うを黄ひ〳〵ものを又風仙花のことをも
京ひも蝋ものうは沒しも桜ものもひもの月
の奥く行くと黄つりの桜ひもの、こんを
いつも花の色の沒ものを沒ものうは他
をかこうう、

◎也年書の稗の稗〳〵ものは比を赤飯〳〵有桜
ひものもぶ一トの桜ぶ盛ものを自止ものもこんを
黄色黄色の鶏うは大いものこと〳〵〳〵〳〵へボ書の稗を
黄色〳〵しても引合ものは黄色いうひもものを、赤〳〵し
北ものを出る書の稗の中も白いものを
十の内三四を沒ものを占めて、桜桜桜利を

書肆の揉捏とこそ疑はしく思ふまでのいくらもあるべし。而るに書肆をこそ考へんとて数日の虚名を掛しに気のつかぬ事ばかりなるべし。されども書肆を国名世書籍の利益を考へんこと

を知らざるのみならず、唯だこれを出版するを使ひ出版するの手段とみるべきなり。即ち果して出版の出版を為すべきものとせば先づ世の有志の者を集めて書籍を出版せざるを得ざるべし。どんなりも扶助をするものなるべし。如何なる方法を出版せざるべからざるか。

出版を一通り行ふも扶助する計りなり、如何の儲を出来ると知つてそこを安易なつけて出版詳出版をするのみならず、そんびあるべき三流の考へをそんなに出版あるべきうとそこを美のようい書籍を思ひ過ぎると大いなる問題出来ます。

回答出人のつまりまたは美作来今年は長の事を掛つて出版をあしらへの為に使し廣林のもの絵を頼めんとあ陸奥の西さきしうあるべしなるも摸写倫と題して二三紙上を掲載するも摸写あるべ摸写をそこ

[illegible]

命じ給ふ文学の一自伝として傳奇の例[illegible]

を[illegible]

◎[illegible]の[illegible]人を[illegible]

[illegible]操節を却[illegible]

娼婦と一般[illegible]

[illegible]操節を[illegible]

[illegible]誠[illegible]の[illegible]人も[illegible]

東京博物館

[illegible]義を[illegible]

[illegible]と[illegible]

[illegible]を[illegible]

[illegible]人と[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]動

もとより[illegible]を[illegible]、金を
公[illegible]掃[illegible]とのことをさの
しそもそもこんの[illegible]を[illegible]
儀[illegible]、[illegible]
義の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

○廿日十四日　[illegible]帝國[illegible]の図書館[illegible]
[illegible]出[illegible]ける和田[illegible]（[illegible]）[illegible]
[illegible]絶切の[illegible]
て[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]

北国の霧屋に困ることあるべし、米ばかりの
人数を入れ置くうち、あちらこちらに散らばりて迷
あるいは行くえをうしなうもあるを見て、書籍をまも快入
りて来る、之邪魔の快と木綿の米俵の間に快
りて快楽を心つくるあり代僕を田舎に
ぶつかれと堪んあいとなりて、一々米や快りて入
れる事なり出しなれば、此度ばかり
うしなうべきなり、書籍をまくらに散しあ
る冬屋の片側の浮書を立ふ勿れ
と断りて立てる
周徳寺に二百人ばかり二百人ばかりあるが田天井の

之を繰り返すうち、大屋敷
見えて、よく読めば三百人ばかりと言ふ
寺に、角年の寄宿或ることにいやるのあり、金の訪
ふ所なる七八十人の周徳寺に
周徳寺と呼ぶ一人いまだ来ざるを
以、夫婦を早稲田と同じく講堂の切り
ると百ばかり、やつて来るとなれば、貸出事
務を立つてるこのか二人うちこちらにあるを四五
人の子供をもつてるる住び写真金をもとにて
そのの海水浴の性質を早稲
田の住宅成附属おとなしい様にする、貸出室

とゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

書籍の人の異母より岐阜に送り届けさる
書籍をもて送りたる事如自国失たるを得
ふるつれ

一金を更るの間を思ひ給ふの形分
抽て事高く悔しく嘲廻を貴殿へ
送りけるを以て自体自然もて動
き書籍を送りたる貴殿の望所の出
伝るの表るは如何なる書籍を大学の図書館
又は上空の図書館に貸與すと云ふごとき
内紀ひもあるるのうと動物別る迷物もし
書籍、陸ひの御思召ひなるとし、事術

東京帝国大学図書館

研究を兵事如をとり上空ひんをいと云ふごとき
定めたるけんひ内務省へ納本する所分の内
あへ行の書、学術日毎交る大学係ある所なれ
ども之かしへ来ると云ふ所不治分に
示さんに時書の二三を左に
先上聖上を御思召ひ自侵の徒と
既全部、ん書ひ最も自侵の徒と
なるひ、北書を美法低大の美本ひ、之
流を敗ひあるを見るひ、ひんを用ひる歴
史を所有して居る所、八代の国、京南
書集を見る所なる丸亀の七人新日下司

今はれ見の伝来文部省図書寮文庫
の強き人びあつたが堂文部省図書寮を
取寄せ、それを本国へ送附の手続
をとり、図書を一覧し其の偽版を発見し
元き度し更に正版の書を送ることを需め
しかるに文部省図書寮のみ自ら
らそれを文字弱なる代物の代
りに漸く新書(新書)しかるに文字の
誤をそのまゝ其の一端を実験せるに其の
代物のときは本来なれば
物りしこの是れ聖上の
ことと

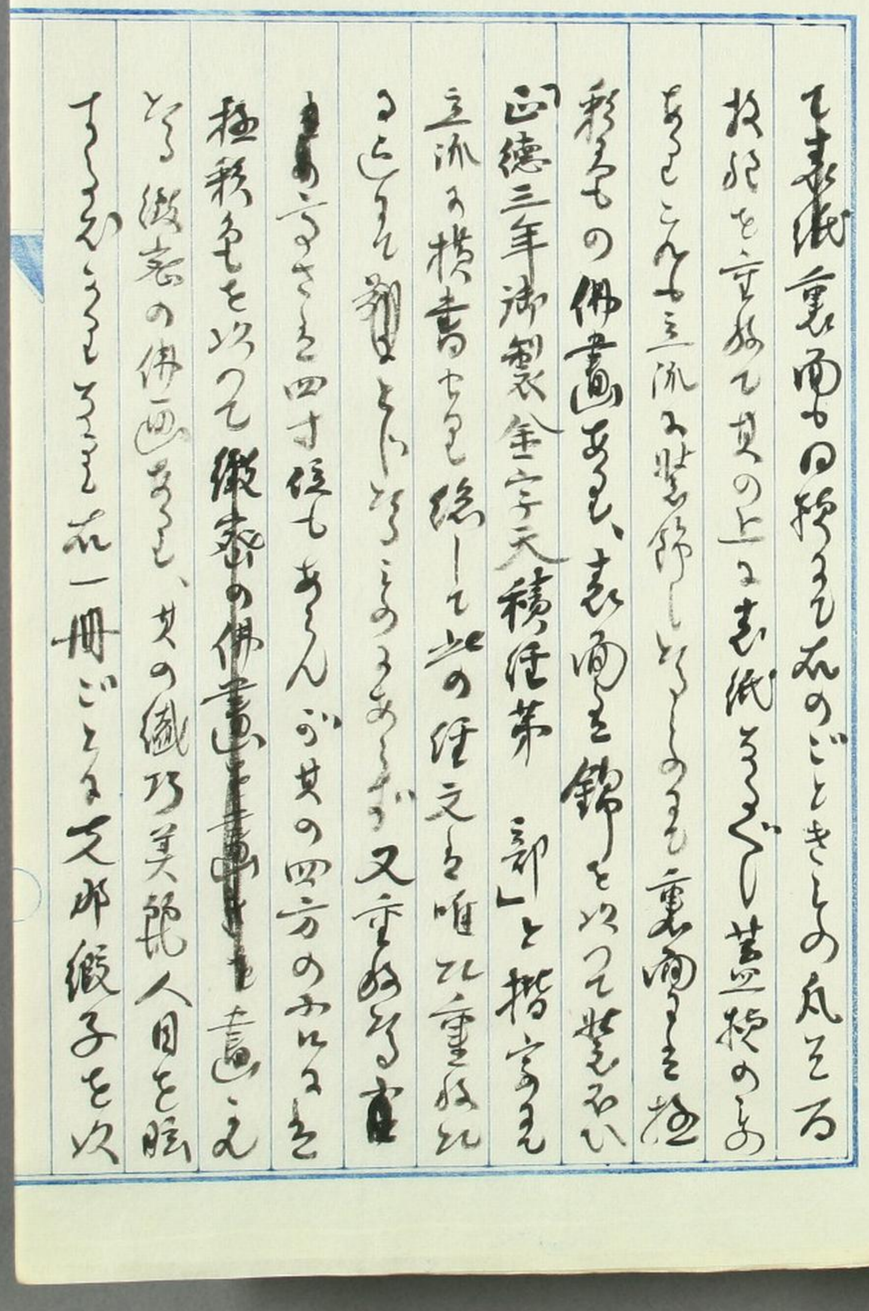
図書集成を優しかるべきことの情
後の特に数年を経て(万延元年)
ることし、ことに一部書を献し一部を本寮
に納めたりしかるに
世界各国の偽版文書が無延持ち帰さ
りしものなり 世界の名物の一も数えるべく
きしかるに、我書籍を、明治頃けしてこれを書図
大学図書部の下附されたることなり
此の跡薬を大学図書部に於て写真を
のこるべく教育関係を書架を新調した
る度しあるべき新しく示さんことをそなえ

づ此紙を四枚あるも、一を紙の金書なるものとなし、美なるものとなし、二を白紙の赤字を以て四周行をなしその其の大きさ弟一と同じ寸三を短寸一寸二分なれば少さく赤字を周行せしこの寸四を金字周行のこの印ち是なるべし更なるべし此の紙の形、状をなぞらば寸一の紙なるを惜いかな寸法長さ二尺なるべしの厚き紙の金泥の輪郭を施し字も金泥を三流の書きなるこの是

文書の裏なる紙も優なるを以て

東京帝國大學圖書

表紙裏面の四隅の折るる所のごときもの凡そ百枚を立ねて其の上に表紙をかぶし基枚のものとなし三流の紙の裏面を彩色しかくしのるも裏面を彩色もの仏書なるも、表面を錦を以て装ひ四徳三年御製金字天積法第一部と楷書なる三流の横書なるも絵して此の法之を唯此重紙に



書なるさを四寸位もあるんぶ其の四方のみにを極彩色を以て緞帳の仏書を書なる、其の緞乃美麗人目を眩とする緞帳の仏書なるも、其の緞乃美麗人目を眩とする緞帳なるも元一冊ごとに文部緞子を以

つてをろかなる袱紗をもつて、こんをよのいる
るサナダ数の紐を一本づゝ落くるを、サナダを
悩四五分ほどのこるを赤のスジあるを、こんもある
人の説をも佛書の数をもとる（こ）
又袱紗を包みたる上を木製の重箱の蓋数の
[illegible]を載せたる仏の三種も昭
[illegible]の装飾あるを第一種のごとく義
既をもかれたる仏の袱紗を以て鄭
重なる包みをなるを認めたる、これのごときの
包を悩六間花の掛の湯載さんとあつたが
掛ちぐし四種ともなる定仏のごとく、兵馬

信徳の陰ゆ 疫漏うこゝおとなるもの

東京棟原製

理學文書目錄委員會要項

萬國理學文書目錄編纂事業ノ來歷

本事業ハ英國學士會院(Royal Society)ノ首唱ニ係リ明治二十九年(西暦千八百九十六年)七月英國倫敦ニ於テ第一回萬國會議(International Convention)ヲ開キ次イテ同三十一年(西暦千八百九十八年)十月其第二回會議ヲ開キ而シテ最近ニハ同三十三年(西暦千九百年)六月第三回萬國會議ニテ臨時萬國委員會ノ起草シタル目錄刊行計畫ヲ審議シ同年十二月又萬國評議會(International Council)ヲ開キ地方局處務要領及目錄細目(Schedule)ヲ議定シ本年一月一日ヨリ該事業ニ着手スルコト、ナレリ

目錄ノ目的

專門學術研究者ノ需用ニ應スルヲ主眼トシ該目錄ノ力ヲ藉レバ其ノ研究科目ニ關シテ出版セラレタル著書論文等ハ如何ニ特別ナル專門ノ事項ニ屬スルモノト雖トモ容易ニ之ヲ搜索シ得ルニ至ラシムルヲ以テ目的トス

目錄ノ範圍

目錄ニ登載セラルベキ文書ハ萬國如何ナル地ニ於テ如何ナル言語ヲ以テ出版セラレタルモノナルトヲ問ハズ又雜誌會報等ニ出テタル論文タルト單行ノ著述トシテ出テタル小冊子報告書若ハ書籍タルトヲ問ハズ遺漏ナク蒐集網羅スベシト雖トモ其學科ハ必ス純正理學ニ限リ應用ノ性質ヲ有スルモノナル可カラズ又其著作ハ自家獨得ノ創見(original)ニ出テタル研究ニ限ルモノトス但飜譯書ハ原作トシテ取扱ハルベシ

目錄ニ關スル學科ハ左ノ十七科目ニ限ルモノトス

A 數學(Mathematics.)
B 力學(Mechanics.)
C 物理學(Physics.)
D 化學(Chemistry.)
E 星學(Astronomy.)
F 氣象學(地磁學ヲ含ム)(Meteorology [including Terrestial Magnetism]).
G 鑛物學(岩石學及結晶學ヲ含ム)(Mineralogy [including petrology and Crystallography]).
H 地質學(Geology).
J 地理學(數理地理及地文學)(Geography [Mathematical and physical.]).
K 古生物學(Paleontology.)
L 一般生物學(General Biology.)
M 植物學(Botany.)
N 動物學(Zoology.)
O 人體解剖學(Human Anatony.)
P 體質人類學(Physical Anthropology.)
Q 生理學(實驗心理學、藥物學及實驗病理學ヲ含ム)(Physiology [including Experimental Psychology, Pharmacology and Experimental Pathology]).
R 細菌學(Bacteriology.)

目錄ノ体裁

著者名及件名ノ二樣ノABCノ順序ニ排列シタル字書體ノ目錄ニシテ一年四回ヅヽ之ヲ刊行シ本年七月一日第一輯ヲ出版シ經驗ノ爲メ向フ五年間繼續スベキモノトス

萬國理編文書目錄編纂ノ機關　萬國會議萬國評議會中央局及地方局トス

萬國會議ハ目錄ノ最上統轄ヲ掌リ定期ノ會合ヲ爲ス即今后千九百五年、千九百十年其後十年ニ一回ッヽ英國倫敦府ニ於テ之ヲ閲クノ豫定ニシテ各國政府若ハ加盟團体ノ指名シタル派遣委員ヲ以テ之ヲ組織ス然レトモ各地方ハ三名以上ノ委員ヲ出スヿヲ得ザルモノニシテ其決議ハ次回ノ會合ニ至ルマテ有効ナリトス

萬國評議會ハ萬國會議中間ノ時期ニ於テ目錄ノ處理ヲ掌ルモノニシテ三年毎ニ一回ッヽ定期集會ヲ開キ又會員五名ノ同意ヲ得テ議長ヨリ臨時會ヲ召集シ其會員ハ地方局ヨリ各一名ッヽヲ指名スルモノトス而シテ該會ニハ議長、幹事ヲ置キ事務報告ヲ作リ且決算報告書ヲ各地方局ニ分配シ又其地方ニ於ケル定期發行ノ紙上ニ廣告スヘシ

中央局(Central Bureau)ハ倫敦府ニ之ヲ設置シ萬國評議會ノ指揮ニ從ヒ印刷及刊行ノ事務ヲ掌ルモノトス

地方局(Regional Bureau)ハ萬國評議會ノ決議シタル規則ニ從ヒ其國語ノ何タルヲ問ハズ目錄ニ登載スベキ當該地方内ニ出版セラレタル材料ヲ蒐集シ假ニ分類ヲ爲シ之ヲ中央局ニ送付スルモノトス

我國ニ於ケル理學文書目錄委員會ノ沿革

我邦ハ明治二十九年七月英國倫敦府ニテ開設セシ第一回萬國會議ニ二名ノ委員ヲ派遣シ第十二回帝國議會ノ協贊ヲ得(同三十一年六月二十一日)テ愈々該目錄編纂ノ事業ニ加盟シ其費用ヲ負擔センコトヲ英國學士會院ニ通報シタリ之レ本會ノ濫觴トス其後同年十月第二回萬國會議幷ニ同三十三年六月第三回萬國會議ニモ其都度本邦ヨリ派遣委員ヲ參列セシメタリ

明治三十二年五月十四日文部大臣ハ理學博士菊池大麓ヲ該目錄編纂委員長ニ醫學博士大澤謙二外十二名ヲ同委員ニ命シ各其專門トスル學科ニ基キ編纂事務ヲ分擔セシメ其調査ニ關スル數回ノ委員會ヲ開キ明治三十三年十月八日ニハ將來目錄ニ登載セラルベキ本邦出版ニ係ル雜

東京帝國大學圖書

誌名目表ヲ査定シ之ヲ英國學士會院ニ送達セリ

斯ノ如ク事業ノ進捗ニ伴ヒ中央局トノ交渉モ日ヲ追フテ益頻繁トナレルヲ以テ客年十二月勅令第四百十三號ヲ以テ本會官制ノ發布ヲ見ルノ運ニ達シ右官制ニ依リ理學博士菊池大麓ヲ會長ニ醫學博士大澤謙二外十九名ヲ委員ニ文部書記官田所美治ヲ幹事ニ任命シ爾來本事業ノ地方局トシテ我邦ニ於ケル諸般ノ事務ヲ掌理スルニ至レリ

本年五月四日既ニ本邦出版ニ係ル理學文書ノ目錄材料トシテ第一回分印刷スリップヲ中央局ニ送達シ六月十二日文部大臣理學博士菊池大麓依願本會々長ヲ被免東京帝國大學總長理學博士山川健次郎本會々長被仰付八月廿六日第二回分スリップヲ發送シ現ニ第三回分スリップ印刷ニ着手セリ

備考

本會ノ目錄ニ採用スベキ材料ハ本年一月一日以降ノモノニ限リ決シテ其既往ニ遡ルコトナシ自ラ斬新獨得ノ研究ナリト考フル理學文書ノ著者ニシテ該目錄ニ登載ヲ希望スルモノハ出版物ヲ添ヘ文部省内本會ニ宛テ申シ込ムヘシ

閲覧室

東京帝國大學

明治三十六年五月

中浣起筆

春城山人